

# 中世後期フランスにおける歴史記述の俗語化について

鈴木道也

## はじめに

中世後期（13-15世紀）のフランス王国は、カペー朝からヴァロワ朝への王朝交代やイングランド王権との百年戦争などの政治的混乱を経験するものの、全体としてはラテン・キリスト教世界における政治的・文化的影響力を増大させることに成功した。それは同時に、王権を核とする国家を理念的にも制度的にも生成・発達させることとなった。当該期についての最新の通史は、法的にも言語的にモザイク状態であったフランスが、カペー朝のフィリップ2世治世（1180-1223）から、ルイ9世治世（1226-1270）を含んでフィリップ4世治世（1285-1314）至る「長い13世紀」に超越的王権観を発達させ、次いで14世紀から15世紀にいたる百年戦争期に「国家として誕生した」と記す<sup>1</sup>。

こうした国家的凝集性の高まりは後の近代国家を準備するものであり、主権概念の理論的成立や代表制の制度的展開については、すでに多くの研究が蓄積されている。しかしこれらを下支えしていく政治的合意がいかにして形成されたのか、すなわち教会勢力を含む諸権力間の「対話<dialogue>」、政治的コミュニケーションの問題について、これまで十分な検討が行われてきたとはいえない。

注目すべきは、この時期のフランス王国において、権力観や王国観、あるいは世界観にかかわる新しいタイプの言語的・非言語的表象が数多く生み出され、それらが限られた知的サークルの範囲を超えて広く普及し始めていることである。そこでは、国王、諸侯、都市、法律家、職能団体、兄弟団、そして騎士修道会のそれぞれが、これまでカトリック教会が独占してきた象徴体系に挑戦し、自らの力を確実なものとするべく正当性を競い合っている。例えば、権力体としての国家の成長と変容は、歴史家たちが

過去を物語る、その方法と内容にも影響を与えていた。歴史は（ラテン語ではなく）俗語で語られ、伝統的なTO図のなかに（聖書的世界とともに）現実世界が描き込まれ、知の体系化を目指した中世の百科全書とも呼ぶ作品群が（トマス＝アクィナスの『神学大全』と並んで）現れる<sup>2</sup>。フランス政治社会の再編期にあらわれたこうした新しい文化現象を、その生産・機能・普及・受容過程について分析し、知の歴史という観点から当該期における「ディスクール＝ノルマティブ（規範的言説）」の解析を目指す研究も知られている<sup>3</sup>。

こうした動向を踏まえて本稿では、中世の歴史家が用いた様々な道具立てのなかで、言語、すなわち歴史記述における言語選択の問題について考えてみたい。フランス王国内でまとめられた俗語の史書、あるいはそれとの比較でラテン語の史書をとりあげ、ラテン語もしくは俗語を用いて歴史家たちが自らの史書を編纂する、その現場を垣間見る作業を通じて、当時の歴史叙述の性格やそれらと権力との関係性を考えていく一助としたい。以下、まずは俗語フランス語の発展に関する通説的理解を確認しておく。

## I 中世後期フランスにおける俗語

中世ヨーロッパ世界における俗語の役割に関しては、世俗文学の成長が俗語＝民衆語を発展させ、次いでそうした民衆語を用いる諸「国民」が自意識を育み、この自意識と俗語作品との往還的な関係のなかでヨーロッパにおける精神と言葉の多様化が生み出されていったとの整理が一般的である<sup>4</sup>。フランス（語）の場合、13世紀後半から14世紀前半がそのような時期にあたるとされる。

このときフランス王国では、話し言葉および書き言葉としての「仏語」[ただしそこにはワロン方言、ピカルディ方言、フランシアン（イル＝ド＝フランス語）、シャンパーニュ方言、ボワトゥー方言、ノルマンディ方言、ロレーヌ方言、そしてオック語（プロヴァンス語）、フランコ＝プロヴァンス語など多くの方言的変種が含まれる]の使用が拡大し、仏語による文書や記録、あるいはラテン語作品の仏語訳などが現れてくる。そしてとくに

王権による「王の言葉」としての仏語（フランシアン）利用の増加が、その支配圏における俗語の浸透に貢献したと強調される。具体的には、カペー朝ルイ9世治世の国王発給文書中に俗語が現れ、フィリップ4世治世にその数が増加する。その後15世紀には発給証書における俗語使用が一般化し、その到達点が、裁判記録をはじめ法的効力を有する全ての文書において仏語の使用を命ずる1538年の「ヴィレル＝コトレ王令」であった。王権の伸張と併行する俗語の拡大、「王の言葉」である仏語の、ラテン語あるいは競合する俗語（例えばオック語）に対する勝利、かかる状況を指してエルコックは、「国が言語を統一したので、言語が国を統一した。そして13世紀末までに、フランスがヨーロッパのすべての国の中で最も強くなり、最も中央集権化された」と述べている<sup>5</sup>。

歴史叙述の領域でも、俗語、ここでは古フランス語（フランシアン）で記された『王の物語<Roman des roys>』が、国王ルイ9世の指示を受けたサン＝ドニの修道士たちの手によって1274年にまとめられていることから、通説的理解を支える証左のひとつとされてきた<sup>6</sup>。ここには、ラテン語と俗語という二重言語構造が変質しつつある状況のなかで、新たな読者層に向けて王権の近くで俗語史書を肅々と編纂する歴史家の姿を想像することができる。

しかし最近の研究は、このようなやや単線的な見方に対して批判的である。以下みるように、中世国家がその統治機構を精緻化させていく段階において、統治に直接関わる法実務の場においても、またその領域内で生み出される歴史叙述の現場においても、記述言語の俗語化は全体的な傾向としては確かに指摘できる<sup>7</sup>。しかし国家形成と俗語の浸透は一体的なものではなく、国家の成長・拡大・衰退と、言語の成長・拡大・衰退、それぞれが独自の展開を持つことに留意する必要があると思われる。俗語（とくにオイル語系）が拡大していく際には、カペー家やヴァロワ家の下での国王直轄支配地の拡大に加え、たとえば①ノルマン・コンクエスト後のイングランドにおける、フランス語を解しフランス語を操る通訳・翻訳家の活躍、あるいは②東方十字軍（1096～）の展開による十字軍諸国家の建設、

また③「アルビジョワ十字軍」(～1229)後のフランス南部や、④シャルル＝ダンジュ進出(1266～)以降のイタリア南部、⑤婚姻関係によって北フランス貴族層がモデナのエステ家、ミラノのスフォルツァ家などイタリア諸都市の有力家門と結びついたことによるイタリア地域へのフランス語文化の普及(14世紀以降)など、様々な契機が存在していた。

さらに、生活に密着し当事者間の利害に直結しているため急激な変更が困難であると思われる法実務の領域と、時として読者(受容者)の意向を無視してプロパガンタ的に言語を選択、発信することもある歴史記述とでは、言語選択の基準にも大きな違いがあるのではないかと思われる。この点に関して次に、膨大な証書の数量的な分析によって中世後期の法文書における言語選択の問題に取り組んでいるセルジュ＝リュジニヤンの研究を取り上げたい<sup>8</sup>。

## Ⅱ 証書集からの傾向分析

フランス南部のオック語圏では、すでに10世紀後半に俗語・ラテン語併用証書が現れ、12世紀にはオック語単独の証書が確認されている。他方フランス語(オイル語)圏では、13世紀初め頃までにトゥールネ、アラス、サン＝トメール、サン＝カンタンなどの集落で、その後13世紀半ば頃にはブルターニュ地方、また13世紀末にはノルマンディ地方で、それぞれ俗語証書の作成が知られている。フランス北部では俗語とラテン語の二語を併用した証書は確認されていない。

統計的には、リュニジャンの研究により1204年の都市ドゥエにおける俗語フランス語証書(借用証書)をさがげとし、13世紀半ば以降にフランス王国北部で発給される証書において、仏語の使用が急速に拡大したことが確認されている(表1)。証書の発給者は、多くが中小領主層ならびに都市当局で、とくに都市当局の俗語利用への積極性がうかがえる(表2)。

ちなみに、中小領主層による仏語利用と、歴史叙述における仏語版の登場は、その初出時期だけを見れば史書の方がやや先行している<sup>9</sup>。例えば、すでに1200年にはサン＝ポール伯、また1206年にはブローニュ伯の依頼によ

表1：13世紀はじめから後半にかけての、フランス北部における俗語証書発給件数[刊行済み証書集からの集計、数字は証書数]

地域名 年代	ヴェルマンドワ (Vermandois)*1	オワーズ (Oise)*2	オート=マルヌ (Haute-Marne)*3	ヴォージュ (Vosges)*4	オーブ、セーヌ =エ=マルヌ、 ヨンヌ (Aube, Seine-et-Marne, Yonne)*5	ポワトゥー (Poitou)*6
1200年以前						
1200-1204						1
1205-1209						1
1210-1214						
1215-1219	6					1
1220-1224	2					1
1225-1229	2					3
1230-1234	5		5		1	9
1235-1239	7		2	5	1	3
1240-1244	9	2	2	4	2	3
1245-1249	8	5	13	4	5	11
1250-1254	2	7	26	18	8	8
1255-1259		26	65	34	12	13
1260-1264		34	74	39	22	12
1265-1269		16	66	28	25	31
1270-1274		29	20	13	22	35
計	41	119	273	145	98	132

\*1:F. Le Proux, *Chartes française du Vermandois de 1218 à 1250*, Paris, 1875.

\*2:L. Carolus-Barré, *Les plus anciennes chartes en langue française*, Paris, 1864.

\*3:J. Monfrin, avec le concours de L. Fossier, *Documents linguistiques de la France*, t. 1; J.-G. Gigot, *Chartes en langue française antérieurs à 1271 conservées dans le département de la Haute-Marne*, Paris, 1974.

\*4:J. Monfrin, avec le concours de L. Fossier, *Documents linguistiques de la France*, t. 2; J. Lanher, *Chartes en langue française antérieurs à 1271 conservées dans le département des Vosges*, Paris, 1975.

\*5:J. Monfrin, avec le concours de L. Fossier, *Documents linguistiques de la France*, t. 3; D. Coq, *Chartes en langue française antérieurs à 1271 conservées dans le département de l'Aube*, Paris, 1988.

\*6: M. S. La Du, *Chartes et documents poitevins du XIIIe siècle en langue vulgaire*, Paris, 1960.

※S. Lusignan, *La langue*, p. 49の表を一部修正

表2：13世紀のドゥーエとサン=カンタンにおける証書発給者別の使用言語[数字は証書数]

ドゥーエ (Douai)	ラテン語	仏語	サン=カンタン (Saint-Quentin)	ラテン語	仏語
エシュバン	13	414	エシュバン	6	99
世俗領主	16	51	世俗領主	3	17
教会領主	20	13	教会領主	12	17

※S. Lusignan, *La langue*, p.50より

表3：13世紀におけるシャンパーニュ伯発給証書の使用言語 [数字は証書数]

	ラテン語	フランス語
1231-1240年	98	9
1241-1250年	32	11
1251-1260年	39	20
1261-1270年	121	46
1271-1274年	11	22

※S. Lusignan, *La langue*, p.56より

り『偽トゥルパン年代記』の仏語訳が作成されていることが知られている。また第四回十字軍の後、シャンパーニュ出身のジョフロワ＝ド＝ヴィルアルドゥアンや、ピカルディ出身のロベール＝ド＝クラリによる十字軍遠征記が俗語で著されているほか、1216年頃にベチュンの逸名作家により、*<Historia Francorum usque ad 1214>*の仏訳なども行われている<sup>10</sup>。

有力諸侯の証書に関しては、シャンパーニュ伯の事例が確認されている(表3)。この表では、13世紀後半の1271-74年に仏語証書が優勢になるが、これは一時的なものとされており、その次の1274-84年段階ではふたたびラテン語証書の数が増え、決定的とはいええない。では、王権が発給した証書に関してはどうか。表4によれば、カペー朝期フィリップ4世治世の発給証書にみられる言語選択傾向を、次の王朝であるヴァロワ朝のフィリップ6世(位：1328-1350)も基本的には踏襲していることが分かる。

表4に基づいて証書発給における全体的な傾向を確認しておけば、日常的に仏語(オイル語)を使用し、法伝統においては慣習法が支配的で、地方官職としてはバイイが管轄する地域では俗語証書が優勢であり、対してオック語・成文法・セネシャル管轄地域においてはラテン語証書が優勢し

表4：フィリップ4世治世(1285-1314)およびフィリップ6世治世(1328-1350)におけるバイイあるいはセネシャル発給証書の使用言語  
[整理は現在の県域別、数字は証書数]

	県名	フィリップ4世治世		フィリップ6世治世	
		ラテン語	仏語	ラテン語	仏語
仏語地域	エーヌ		8		129
	アルデンヌ				16
	オーブ		1		66

仏語地域	カルヴァドス	1	8		51
	シャラント	2	2		2
	シャラント=マリティーム	5	4	4	31
	シェール		4	2	19
	ウール		10	1	32
	ウール=エ=ロワール			7	
	アンドル	1	3	1	9
	アンドル=エ=ロワール	2		8	
	ロワール=エ=シェール	2		2	
	ロワレ		9	1	17
	メーヌ=エ=ロワール			7	
	マンシュ		2		66
	マルヌ	1		3	82
	オート=マルヌ				29
	ムーズ				9
	ニエーヴル	2	1		7
	ノール		1	1	26
	オワーズ		3		49
	オルヌ				6
	パ=ド=カレー			1	11
	サルト				6
	セーヌ=マルティーム	14		42	
	セーヌ=エ=マルヌ		29	1	53
	ドゥー=セーヴル				8
	ソンム		1	1	45
	ヴィエンヌ	2	3		16
	ヴォージュ				6
	ヨンヌ	1	4		44
	イヴリーヌ		3		38
混合地域	ピュイ=ド=ドーム	5		9	10
ラテン語地域	オード	7		56	
	アヴェロン	10		12	1
	カンタル			9	
	コレーズ			4	
	ドルドーニュ			13	
	ガール	7		18	
	ガロンヌ	4		56	
	ジェール	3		13	
	ジロンド	1		16	2
	エロー	8		26	
	ロット	3		10	
	ロット=エ=ガロンヌ	1		16	
	オート=ピレネー	2		9	
	ローヌ			6	
	ソーヌ=エ=ロワール	2		14	4
	タルン	4		27	
	タルン=エ=ガロンヌ	10		23	
	オート=ヴィエンヌ			11	

※S. Lusignan, *La langue*, pp. 74-75の表を一部修正

ているということが出来る。証書の種別をみていくと、フランス北部の場合、訴訟外裁判権が行使され、法行為にお墨付きを与える形で外部から第

三者的に介入してくるような事例において発給された文書には仏語が、またフランス南部では公証人による法行為の確認が行われる場合にはラテン語が支配的であるといえることができるだろう。全体数としては、国王発給文書はカペー朝期を通じてラテン語が優越しているものの（表5）、フィリップ6世治世に俗語証書急増へのひとつの画期（表6-1）がみられ<sup>11</sup>、シャルル7世治世（1422-1461）の証書分析から、とくに恩赦状（Lettre de rémission）の発給に際して仏語が使用されていることが確認できる（表6-2）。

このように、通説的理解が重視していた13世紀後半から14世紀前半の時期は、確かに法実務の現場では俗語普及の転換点ではあったかもしれないが、その歩みは一定ではなく、カペー朝期の緩やかな広がり、ヴァロワ朝フィリップ6世治世の劇的な変化によって特徴づけられるように思われる。フランス北部における俗語証書の広がり、当初は中小領主層や都市当局が先導していた。では同時期、フランス王国内の歴史叙述においてはいかなる言葉が用いられていたのだろうか。

表5：サン＝カンタンに対する国王発給証書類の使用言語[数字は証書数]

国王	ラテン語	フランス語	合計
フィリップ4世	47	4	51
ルイ10世	5	1	6
フィリップ5世	31	4	35
シャルル4世	23	7	30
フィリップ6世	10	90	100
ジャン2世	51	13	64
シャルル5世	5	30	35
シャルル6世	4	69	73

※S. Lusignan, *La langue*, p. 91の表を一部修正

表6-1：1330年以前・以後のフィリップ6世発給証書類の法圏別使用言語

	慣習法地域		混合地域		成文法地域	
	ラテン語	フランス語	ラテン語	フランス語	ラテン語	フランス語
1330年10月以前	599	270	63	14	244	10
	69%	31%	82%	18%	96%	4%
1330年10月以後	383	3851	110	129	964	363
	9%	91%	46%	54%	73%	27%

※S. Lusignan, *La langue*, p. 83より



表6-2：シャルル7世治世、1441～1451年における尚書局発給証書類の使用言語

	フランス語	ラテン語
廃止命令	19	
解放命令	2	
償還命令	6	6
爵位授与		27
特権授与	21	14
市場開設許可	4	1
嫡出転化		14
城壁建設許可	24	
貨幣役人の任命	5	
恩赦授与	560	5
保護命令	9	2
合計	650	69

※S. Lusignan, *La langue*, p. 89より

### Ⅲ 歴史記述における俗語使用

表7は、ギュヨ＝バツシーの研究を参考に<sup>12</sup>、『王の物語』の編纂以降、黒死病が流行する1348年までのおよそ70年間にフランス王国で編纂された史書と、そこで用いられている言葉を整理したものである。これをみると、Ⅱで言及したようにサン＝ポール伯やブローニュ伯などの先駆的な事例はいくつかあるものの、当該期に確認される俗語史書の数はずしも多くはなく、全体の2/3は依然としてラテン語を用いていることが確認できる。

使用言語を問わず史書の制作には波があるが、その多寡はフランスの地における政情不安を背景としているように思われる。整理番号9、11、16、19、21は、13世紀末から14世紀初めにかけての、フランス王権によるフランドルへの介入、いわゆる「フランドル紛争」の時期に、また24、25、26はフィリップ4世治世の終わりからカペー朝末期にかけて、そして29、30、31、32は1328年のヴァロワ朝成立期に成立をみている。制作地域としては、王権と関わりの深いパリやサン＝ドニが多く、その他ではノルマンディ、フランドル、ブルターニュのフランス北部各地、またサン＝マルシャル修道院のあるフランス中南部のリムーザン(リモージュ)などもみられる。他方、13世紀前半には活動が盛んであったシャンパーニュ地方やフランス南部は、全体としてみれば制作活動は低調であった。

こうした史書の制作に従事するのは圧倒的に教会・修道院であり、俗人

表7：『王の物語』成立前後から1348年にかけてフランス王国内で編纂された主な史書

整理 番号	作品名(一般名)	記述言語・文体	成立時期	制作主体	備考
1	Chronicon	ラテン語・散文体	1204年頃	フロワモン修道 士Hélinaud de Froidmont	シトー会、普遍年代記
2	Chronicon	ラテン語・散文体	1232- 1241年頃	トロワ＝フォン テヌ修道士 Albéric de Trois- Fontaine	シトー会、普遍年代記
3	Récits d'un ménestrel de Reims(Chronique des Flandres et des croisades)	俗語・散文体	1260年頃	Ménestrel de Reims(ランス)	
4	Flores historiarum	ラテン語・散文体	1268-71	クレルモン司教 Guy de la Tour du Pin	Speculum historialeの要約に1268年ま での歴史を追記、教皇グレゴリウス10 世に献呈
5	Chronique dite de Baudouin d'Avesnes	俗語・散文体	1271(1281)- 1284	不明	Speculum historialeの一部翻訳と、歴 代フランドル伯、エノー伯の事績に関 する記述
6	Cronica	ラテン語・散文体	1275年頃	トゥールーズ伯の 廷臣Guillaume de Puylaurens	アルビジョワ十字軍についての記述多 数
7	Chronicon Rugense	ラテン語・散文体	1291-	不明(リュイスの修 道士?)	記述の始まりは11世紀から
8	Chronique de l'abbaye de Saint-Pierre- le-Vif de Sens	ラテン語・散文体	1295-	サン＝ビエール＝ ル＝ヴィフ(サンス) 修道士Geoffroy de Courlon	普遍年代記。サン＝ビエール＝ル＝ヴィ フ修道院長、サンス司教の交代を、王、 教皇、皇帝の治世と並んで叙述
9	Chronique toursennaise	ラテン語・散文体	1296- 1314	不明	1302年前後の記述多
10	Chronique de Saint- Magloire	俗語・韻文体	1296年頃	サン＝マグロワール 修道院(パリ)	1214年から1296年までの記述のみ、ブ ロヴァン(シャンパーニュ地方)に関する 言及多数
11	Chronique artésienne	俗語・散文体	1298- 1304頃	アラス、作者不詳	Courtraiの戦いを中心に、1296年から 1302年にかけての記述が中心
12	Chronicon	ラテン語	1300- 1340	サン＝ドニ修道 士Guillaume de Nangis	
13	Chronique française abrégée des Rois de France	俗語・散文体	1300- 1381	サン＝ドニ修道 士Guillaume de Nangis	
14	Chronicon monasterii Ardenae	ラテン語・散文体	1302-	不明	
15	Branche des royaus lignages	ラテン語・韻文体	1304- 1307	Guillaume Guiart	<i>Roman des Rois</i> の参照多数。フィリップ 2世治世から1306年までを記述。作品は フィリップ4世に献呈。特定の教会・修 道院に所属した形跡なし。
16	Chronique Paimpont	ラテン語・散文体	1305-	ノートル＝ダム＝ ド＝バンボン修道 院(バンボン)	
17	Chronicon Regum Francorum	ラテン語・散文体	1306- 1331	ドミニコ会士、南 フランス諸教会司 教Bernard Gui	
18	Memoriale historiarum	俗語および ラテン語	1307 (もしくは 1302)- 1335	サン＝ヴィクトル 修道士(パリ)Jean de Saint-Victor	Vincent de BeauvaisおよびGeoffroi de Parisの著作からの引用多数
19	Annales gandenses	ラテン語・散文体	1308-10	ガンのフランシス コ会士	1297-1310年までの都市ガンについての 記述中心
20	Chronique béarnaise	ラテン語・散文体	1308- 1331	不明	

21	Chronique anonyme de Soulogne-sur-Mer(Chronique anonyme finissant en 1308)	俗語・散文体	1308年頃	ノートル＝ダム＝ド＝ブローニュ教会(ブローニュ＝シュル＝メール)、作者不詳	普遍年代記の形態をとりつつ、地域史的記述が豊富
22	Chronicon S. Martialis Lemoviensis	ラテン語・散文体	1312-	サン＝マルシャル修道院(リモージュ)	複数の編者の存在(Bernard Itier, Etienne de Saivaniec, Hélié du Breuil, Hélié Autenc)。最終的には、普遍史的部分と修道院縁起の部分が分離
23	Flores Chronicorum	ラテン語・散文体	1312-1315	ドミニコ会士、Bernard Gui	普遍年代記
24	Chronique d'Yves de Saint-Denis	ラテン語・散文体	1313-1314	サン＝ドニ修道士 Yves	フィリップ4世治世期に関する記述中心、フィリップ5世に献呈
25	Chronique métrique de Geoffroi de Paris	俗語・韻文体	1313-1317	フランス国王廷臣 Geoffroi de Paris	1300-1316年までのフランス王国史を記述
26	Chronicon Turonense (abbreviatum)	ラテン語・散文体	1316-1337	サン＝ジュリアン修道院(トゥール)	1224年成立のラテン語年代記の続編
27	Chronicon manasterii sancti taurini Ebroicensis	ラテン語・散文体	1317-	サン＝トールン修道院(エヴルー)	複数の編者の存在
28	Chronique de Maleu	ラテン語・散文体	1322-	サン＝ジュニアン教会(サン＝ジュニアン) 参事会員 Étienne Maleu	サン＝ジュリアン教会参事会員 Étienne Maleu
29	Petite Chronique de Vézelay	ラテン語・散文体	1324-	不明	同時代に関する記述は断片的(12世紀後半 Hugues de Poitiersによる当地への修道院の創建について記した後、1280年までの出来事を記すが、その後は、1281年、1284年、1324年直前の修道院の状況についてののみ記述)
30	Manuel d'histoire de Philippe de Valois	俗語・散文体	1326-1330	サン＝ドニ修道院	普遍年代記、Bernard GuiのFlores Chronicorumと、Vincent de BeauvaisのSpeculum historiarieの翻訳が中心で、一部写本に1346年以降に関する追記あり
31	Livre des coutumes de Bordeaux	ラテン語・散文体	1332-	サン＝タンドレ大聖堂(ボルドー)	歴代ボルドー大司教、フランス王、シャルルマーニュ等についての記述混在
32	Annales de Saint-Etienne de Caen	ラテン語・散文体	1336-	サン＝テティエンヌ修道院(カン)	1143年までの記述はAnnales de Rouenの借用、複数の編者が1336年までを追記
33	Anciennes chroniques de Flandre	俗語・散文体	1340-	サン＝ベルタン修道院(サン＝トメール)、作者不詳	12世紀後半頃成立のラテン語年代記 Flandria generosaの翻訳および追記
34	Chronicon Burdegalaense S. Columbae	ラテン語・散文体	1340-	サント＝クロンブ修道院(ボルドー)	修道院縁起が記述の中心
35	Chronicon Cadomensis anonymi	ラテン語・散文体	1341-	不明(ドミニコ会系の修道士?)	普遍年代記。ブルターニュでの紛争についての記述あり
36	Annales de Saint-Evroul	ラテン語・散文体	1342-	サン＝テヴルール修道院(サン＝テヴルール＝ノートルダム＝デュ＝ボワ[ノルマンディー])	1298年までは記録が連続、その後、1342年までの記述が欠落、その年に、Pierre Rogerの教皇選出の出来事のみ記録。1298年までの記述についても、修道院長の選出や交代に関する記述が中心
37	Chronique de Guyenne	俗語およびラテン語	1346-	不明	百年戦争緒戦についての記述あり
38	Chronique de Béziers	俗語・散文体	1348-	不明	普遍史に都市ベジエについての記述を含む
39	Le livre du bon Jehan, duc de Bretagne	俗語・散文体	1381-85	ブルゴーニュ公の廷臣 Guillaume de Saint-André	

※ I. Guyot-Bachy, Quelques tendances, pp.279-298をもとに筆者作成。

主体のものは限られていた。制作主体となっている修道院はベネディクト会系が多いが、個々の修道院の活動は散発的であり、複数の史書の制作もしくは追記という形で継続的に修史活動を行っているのは、サン＝ドニ修道院やサン＝マルシャル修道院ぐらいであった<sup>13</sup>。俗語史書に限定した場合、地域的にはフランス北部に集中し、14世紀半ばになるとフランス南部でも確認されるが、そこには普遍年代記（世界年代記）を翻訳したものも散見される。また数も多くはなく、制作主体も不明である。本稿では深く言及しないが、内容的には、ラテン語・俗語を問わず、三層の歴史(普遍史、王国史、地域史[都市史])のなかで、普遍史(教皇・皇帝史)と地域史を結びつけたものが多く、編纂者が所属する修道院の縁起のみを記したものも存在している。

こうしてみると、王権周辺を除けば、この時期フランスの王朝史を継続的に叙述した史書はほとんど確認されないということになるだろう。ただし、普遍年代記として著されているヴァンサン＝ド＝ボーヴェの『歴史の鑑<Speculum historiale>』については、彼の出身母体であったドミニコ会との関わりも考えられるものの、『歴史の鑑』を含む百科全書的作品『大いなる鑑』の編纂に際して必要な経済的支援をルイ9世から受けており、また本作品についてはフランス王権に関する記述も多い。こうしたことから研究者の多くはこの作品にカペー王権とのつながりを認めており、王国年代記のひとつとみなすことは可能である<sup>14</sup>。こうした点も含め、表7に記された史書の各々に関しては、その編纂内容についてのより詳細な検討が必要であり、今後分析作業を進めていきたい。しかし全体としてみれば、歴史記述における俗語使用は、従来考えられていたよりもより緩慢なものであったように思われる。法実務の場にあっても歴史記述においても、王権の政治的な影響力の拡大と俗語の浸透は一致していなかった。両者は必ずしも一体的なものではなく、それぞれ独自の展開を見せている。フランス北部において顕著のように、俗語としてのフランス語は様々な地域的偏差を含んだまま漸次的に普及しており、各地でコミュニケーション言語としての機能を強化していくなかで、その影響力を拡大させていた。王権に

よるフランス語の活用は、むしろそういった状況に突き動かされる形で進んでいったと考えた方が妥当であろう。では、かかる状況にあって王権の周辺で生産された数少ない俗語史書は、そこにいかなる意図と配慮を含んでいるのであろうか。

#### Ⅳ 俗語史書とラテン語史書

##### 1 13世紀末、サン＝ドニ修道士ギョーム＝ド＝ナンジによる史書編纂

『王の物語』をまとめたサン＝ドニ修道院でも、その後編纂される伝記や史書はほとんどがラテン語であった。サン＝ドニ修道院に限らず、当時の知的活動を支える場に俗語が入り込む余地はほとんどなかったともいえ、そのことは蔵書構成からもうかがえる。写本に残る整理番号と、サン＝ドニ修道院蔵書であることを示す書き込み（例<Iste liber est ecclesie beati dyon>）を手がかりに当該修道院の蔵書を分析したドナテッラ＝ネビアイ・ダッラ・ガルダによれば、13世紀末段階でサン＝ドニ修道院に所蔵されていたと思われるのは以下の作品群であった<sup>15</sup>。まず、5-6世紀の神学者偽ディオニシウス＝アレオパギタの『全集』<Opera> 2点[現在、Vatican, B.A.V., Reg. lat., ms. 67およびLondon, Lambeth Palace, ms. 382所蔵、以下同様]、4-5世紀にフランス南部地域で布教活動を行った聖ジャン＝カシアン（ヨハネス＝カシアヌス）の著作（<De Coenobiorum Institutis>）[Vatican, B.A.V., Reg. lat., ms. 120]、修道院長シュジェールの命を受け、1120年から31年頃にまとめられた史書（<Liber modernorum regum Francorum>）[Paris, Bibl. Mazarine, ms. 2013]、プレモントレ会のリカルドゥスの<Expositio, canonis missae>[Paris, B.N., lat.1009]、プリニウスの『博物誌』[Leyde, B.U., Voss., lat. F0]、エモワン＝ド＝フルリ編の史書（<Historia Francorum>）[Vatican, B.A.V., Reg. lat., 550]。また会計記録からは、1284年にアヴィケンナの写本を1点入手していることが知られている<sup>16</sup>。

サン＝ドニ修道院が俗語史書の制作に、といってもラテン語からの翻訳であるが、再びその制作作業に着手するのは、『王の物語』から20数年経た13世紀末のことで、このとき事業を主導したのがギョーム＝ド＝ナ

ンジである<sup>17</sup>。サン＝ドニでは、蔵書管理業務は典礼にかかわる聖歌隊員(chantre)に委ねられていたとされるが、ギョーム＝ド＝ナンジもまたその一員であった<sup>18</sup>。彼は、自ら編纂した作品の冒頭で、「余、このサン＝ドニ教会の修道士であるギョーム＝ド＝ナンジは、余に願い求めた良き人の求めに応じて、かつて諸王を系統樹のかたちでラテン語を用いて記したところを、ラテン語を解することのできない者たちのために、ラテン語からフランス語へと翻訳したのである……」と記す<sup>19</sup>。

彼は王の命を受け、俗人を読者とする史書の翻訳・編纂事業に取り組む。それが表7-整理番号13の歴史書である。ここでは成立年代や構造に関する詳細な議論は紹介しないが、文献学のこれまでの成果によれば、この作品は13世紀末、1297年から1300年頃に翻訳作業が始まり、プリマの『王の物語』とギョーム＝ド＝ナンジ自らが過去に編んだラテン語史書(表7-整理番号12)を下敷きにしている。しかしこの翻訳版の制作に際しては、二つの方向での加筆が行われていることが確認できる<sup>20</sup>。一つは、歴代のフランク人たちの王、具体的にはシャルルマーニュ・ルイ敬虔帝・シャルル2世などのカロリング期の王たちによって、サン＝ドニ修道院に対して寄進が行われたとするエピソードが新たに追加されている。すでに『王の物語』のなかでもカペー王家からサン＝ドニ修道院への寄進に関する記述は目立っていたが、過去のいずれのラテン語史書にもみられない「シャルルマーニュからの寄進」が、ここで新たに書き加えられている。また二つ目として、歴代の王たちに忠実に仕えた諸侯たちの名が具体的に書き添えられていることが挙げられる。<sup>21</sup>

このように、俗語史書は翻訳という形をとりながらもその記述内容を「充実」させていくが、加えて注目すべきは、この時期にサン＝ドニ修道院で制作された俗語史書写本では、<Cy commencent les croniques abregees de la geste françoise>[BNF, fr. 6463]あるいは、<Cy commencent les cappitres des chroniques des rois de France>[BNF, fr. 2603]、また <les croniques de la geste françoise>[BNF, fr. 10133]、<Cy commencent les croniques des gestes royaulx et franchoises>[Rouen, BM, Y56]といった書き出しに共通するように、編者た

ち、そしてまたその写本制作者たちが、自らの作品をクロニク（cronique）＝「年代記」と称するようになることである<sup>22</sup>。

サン＝ドニ修道院ではじめて仏語を用いた『王の物語』が13世紀後半に編まれたとき、その冒頭部では、「年代記」を意味する〈cronique〉という語は、典拠となるラテン語史書を指しており、自らが編纂している作品（ouvrage）は、歴史（histoire）ではあったが〈cronique〉ではなかった。ここで用いられる〈cronique〉とは歴史を汲み出す源泉となるべきものであり、フランス語で記された史書の内容にお墨付きを与えるものであった<sup>23</sup>。

いまだ推論にとどまるが、俗語史書に対する〈chronique〉なる表現の付与は、それがラテン語からの単なる翻訳物であることを止め、そしてもちろん、いわゆる「ロマン〈roman〉＝物語」とも異なって、歴史書として独自の歩みを始めつつあることを示しているのかもしれない<sup>24</sup>。こうした俗語の歴史記述が、とくに同時代史叙述に関して少しずつ現れてくると、今度は逆に、俗語の歴史記述の内容を、当時まだ主流であったラテン語の歴史記述が取り込んでいくといった事例を見つけることもできる。ここではその一例を紹介しておきたい。

## 2 14世紀初め、サン＝ヴィクトル修道院のジャンによる『歴史の覚え』

天地創造から書き起こし、普遍年代記の体裁を持ちながらもフランス王国史、とくに14世紀初頭のカペー朝末期のフランス王国史についての詳細な記述を含むことで知られるラテン語年代記に、12世紀からの学問的伝統を有するサン＝ヴィクトル修道院の修道士ジャン＝ド＝サン＝ヴィクトルが著した〈Memoriale historiarum（歴史の覚え）〉がある（表7-整理番号18）。

この作品では、カペー朝末期の1309年から1316年にかけての記述に、わずか一点の写本のみが残存するジョフロワ＝ド＝パリの「クロニク＝メトリック（押韻年代記）」と呼ばれる俗語史書（表7-整理番号25）をラテン語訳して用いている<sup>25</sup>。ジャンがこの史書を参考に行っていることはすでに20世紀の初めには指摘されていたが、その具体的な利用方法についての検



討はほとんど行われてこなかった。しかし2000年のギュヨ＝バッシーの研究により、ジャンのラテン語訳の特徴が明らかにされている。彼女によれば、ジャンはジョフロワの文章をラテン語訳する際に、内容を吟味し、信頼性が低いと判断した部分に関しては思い切って削除しており、結果としてかなりの簡略化をはかっているという<sup>26</sup>。例えば、フィリップ4世の忠実な家臣として貨幣改革を断行したジャン＝ド＝マリニーについて記している部分は、『歴史の覚え』では以下のように記される。

<Anno MCCCXII fuit in Francia magnus defectus bladi, vini et fructuum, et magna mortalitas. Et eodem anno, bidaudi de Francia sic revertentes, stipendiis non solutis, per patriam praedas exercebant multosque spoliabant ; et usque Bituris venientes fuerunt arrestati, et fere quingenti sunt in patibulis suspensi.>

ここでは、①いつ<Anno MCCCXII, eodem anno>、②誰が< bidaudi>、③どこから< de Francia sic revertentes>、④どうして<stipendiis non solutis, per patriam praedas exercebant>と、まず経緯を簡潔に述べた後、その結果として⑤どこで（捕まり）<usque Bituris venientes fuerunt arrestati>、⑥誰が<quingenti>、⑦どうなった<sunt in patibulis suspensi >が記される<sup>27</sup>。この部分は、ジョフロワの作品では以下のように記される<sup>28</sup>。



< Mil CCC. et XII. Cel temps  
Fruiz faillirent, si com l'entens;  
Aussi firent et blez et vins.  
En cele annee ont fait bydauts  
Assez de Flandres s'en retournent,  
 Tout por ce que paiez n'estoient.  
 Des viandes, du pain, du vin  
 Prenotent il par le chemin  
 Ne riens n'en vouloient paier;  
 Les gens faisoient esmaier,  
 Por ce qu'estoient grant nombre.  
 Par les chanz, dessouz chascun  
 ombre,

Ci cinq, ci quatre et ci dis  
 Gesoient il par le país.  
 Si firent assez de grieté,  
 Mes au derrenier arrêté  
Furent à Borges, en Berri.  
Si en fu le nombre amenri.  
Taut alerent et tant venirent  
Que bien cinq cens la em pendirent:  
 Les gibbez en furent touz plains.  
 Des pouvres ne furent pas plains.  
 Si croy ju que ce fu damage  
 Que il moururent en tel rage;  
 Et di encor, et m'i acort,  
 Qu'en lor fist droit aveques tort.>

ジャンは、原典にあった王およびその政策に批判的な部分（引用文中の下線部）を削除し、過酷な取り立てに抗して訴え出たものが捕らえられ、多くの者（ここでは500人とされている）が処刑された出来事の、その事実関係を伝える部分のみを淡々と引用している。ギュヨ＝バッシーは、一連の作業をラテン語化におけるテキストの「浄化」と呼んでいる。

「浄化」とはどのような意味であろうか。ジャンのこの作品に関しては、ジョフロワをはじめ何点かの仏語作品を参考にしている部分があり、それらをラテン語に訳す際に、俗語で表現されたことで本来のラテン語とはやや異なる意味内容を帯びた言葉を、その意味を含んだままラテン語に戻してしまったことにより、もともとのラテン語にはなかった綴りや意味を含む言葉がみられることが指摘されている。しかし他方で、同時代史部分を除いては、その記述の多くが以前に書かれたラテン語史書の内容を用いており、またケクロやカエサル作品からの引用も多いことが知られている。そうした部分が醸し出す普遍年代記としてのある種の中立性を維持するために、同時代史的部分の記述に関して、上で指摘したような内容の簡略化が行われているのではないかと推測することができる。やや強い表現であるが、この作業をギュヨ＝バッシーは「浄化」と呼んでいるのである。裏返していえば、ジョンが参照したジョフロワの俗語韻文体年代記は、そうした制約から離れ、時に当時の王政を厳しく批判しながらも、俗語を用

いて同時代史をいきいきと描き出しているということもできるだろう。

### 3 14世紀前半、ジャン＝ド＝ヴィネによる『歴史の鑑』の仏語訳



図版：ジャン＝ド＝ヴィネ仏訳『歴史の鑑』冒頭部[Paris,B.N., Ms fr. 316, fol.1r.]. 左側では家臣を従えたフランス国王ルイ9世がヴァンサン＝ド＝ボーヴェに対して『歴史の鑑』の執筆を求めている(1250年代頃の様子)。右側では、フィリップ六世妃のジャンヌ＝ド＝ブルゴーニュが、ジャン＝ド＝ヴィネに対して『歴史の鑑』の仏語訳を作成するよう求めている(おそらく1320年代頃)。この挿絵を含む写本の制作は14世紀前半。

最後に、14世紀前半の王朝交代期における王権周辺での史書編纂と俗語使用との関係について考えてみたい。ヴァロワ家によるフランス王位継承の正当性に対して王国内外から示された不信感を払拭するため、王権周辺では様々な施策が検討されたと思われる。新しくフランス王となったフィリップ6世の妻ジャンヌと、カペー朝を象徴する君主の一人であるルイ9世との血縁関係、すなわちジャンヌがルイ9世の孫であるという事実は、そうした彼らにとって重要な武器のひとつであった。この血縁的連続性の強調と俗語史書編纂事業を結びつけたひとつの試みを、ここでは指摘しておきたい。上の図版は、先に紹介したヴァンサン＝ド＝ボーヴェの『歴史の鑑』に関して、14世紀前半に作成された俗語版の冒頭に描かれた挿絵である。この挿絵は、かつてはルイ9世がその編纂にかかわり、そして今や広く流通しているヴァンサン『歴史の鑑』が、今度はその孫であり、新しいフランス王フィリップ6世の妻であるジャンヌのもとで仏語訳されていることを示している。この挿絵は、史書編纂における仏語使用、あるいはラテン語から仏語への翻訳といったものが、新しい王権のプロパガンダ政策において重要な役割を果たしていることをはっきりと示している。

ジャンヌの祖父であるルイ9世は、写本収集を重要な文化事業のひとつ

に位置づけ、それに並々ならぬ意欲を示した人物として知られている。彼の廷臣集団のなかでもとりわけ国王との関係の深さで知られるジョフロワ＝デ＝ボーリユーは、王に同行して十字軍に参加した際の出来事として、王ルイ9世はサラセン人たちがあらゆる分野の文献を調査し、複写し、そして収集していることに大きな刺激を受け、遠征を終えて王国に帰還するや、王は直ちにその範に倣おうとしたと記している<sup>29</sup>。王は、あらゆる修道院に収められている「良き書」を自ら費用を負担して複写させ、王宮のサント＝シャペル内にあった図書室に揃えさせた。王はその部屋に自ら足を運んで本を読むとともに、学ぼうとする者には入室を認め、その後も蔵書を増すための努力を惜しまなかったという<sup>30</sup>。

また『薔薇物語』の作者の一人ジャン＝ド＝マンは、フィリップ4世に献上したボエティウスからの翻訳『哲学の楽しみについて（Li livres de confort de Philosophie）』の序文で、「あなたはラテン語をよく解するかもしれないが、フランス語はラテン語よりもはるかにたやすく理解することができます。」と述べ、翻訳活動の重要性を説いている<sup>31</sup>。しかしカペー朝期に、王宮に収集された文献を対象として大規模な翻訳事業が展開された形跡はない。

これに対してヴァロワ王権は、史書に限らず古典的作品についても、俗語（仏語）への翻訳を積極的に進めている。ヴァロワ朝最初の王であるフィリップ6世、その妻ジャンヌ＝ド＝ブルゴーニュ、そして彼らの子、後のジャン2世（位：1350-1364）は、複数の翻訳家を登用して仏語翻訳事業を展開した<sup>32</sup>。続くシャルル5世（位：1364-1380）もその伝統を継承している。彼が側近のニコル＝オレームやジャン＝ルベグらとともに学術研究の拠点として王宮に新たに設立した図書室、そしてそこに収められた数多くの俗語文献の歴史的重要性については、デリースルらの研究によって広く知られている<sup>33</sup>。この図書室は、当時教皇庁の置かれていたアヴィニオンに教皇ヨハネス22世（位：1316-1334）が建てた図書室とならび、その豊かな蔵書によって14世紀ヨーロッパを代表するものとなっている。

19世紀末に仏語版『カエサルに至る古の歴史（Histoire ancienne jusqu'à

César>』の分析を行ったポール＝メイヤーは、ヴァロワ王権による一連の翻訳事業の意味にいち早く注目した研究者であるが、王室の近くにいた翻訳家たちのなかで彼がとくに注目したのが、先の図版に描かれている翻訳家ジャン＝ド＝ヴィネであった<sup>34</sup>。もっとも、この時代の翻訳家たちの活動状況はその後アントワヌ＝トマとロベール＝ボシユアらの研究によって具体的に明らかにされたものの<sup>35</sup>、オットー＝ジョルダンやクリスチャン＝ノウルズらの分析にもかかわらず、ジャン＝ド＝ヴィネについて知られていることは現時点でもそう多くはない<sup>36</sup>。

ジャンは、1282年から1285年頃にノルマンディ地方カルヴァドス県のファレーズ近くにある<Vignay>の地に生まれ、その後聖ヨハネ騎士修道会が有するパリのサン＝ジャック＝デュ＝オ＝パ教会に入っている。その後いかなる事情によってか、ヴァロワ王家の厚い信任を得て王宮に入り、1320年代、おそらくヴァロワ家の王位登極後間もなく『大いなる鑑』の一部をなす『歴史の鑑<Speculum historiale>』の訳業を命ぜられている。

全体で四部分からなるジャン＝ド＝ヴィネ訳『歴史の鑑』のうち、最初の巻が出されたのは1332年以降であり、依頼からかなりの年月を費やしていることが分かる。この訳書には28点の写本が現存している。現存する写本の所蔵場所は様々であるが、ほぼすべてが王やその近親者などヴァロワ王家の身内によって所有されていたことが確認されており、作品としての影響力は限定的であったように思われる<sup>37</sup>。また最近の研究成果によると、ジャンの翻訳活動は、とくにその初期においてはきわめて逐語訳的で、誤訳も多いとされている<sup>38</sup>。しかし彼はその後も精力的に翻訳活動を進め、現在知られているところでは、『歴史の鑑』を筆頭に1340年代まで以下12作品の翻訳を手がけている。

1『歴史の鑑<Miroir historial>』

2『プリマの年代記<Chronique de primat>』：オリジナルは失われてしまっているが、Primatと呼ばれていた人物が記したルイ9世治世についての記述を多く含む年代記。『歴史の鑑』の後に翻訳されたと推定される。

3『海外の地における驚異<Merveilles de la terre d'outremer>』：1330年頃

- 成立したとされるフランシスコ会士ボルデノーネのオドリコ『旅行記<Itinerarium>』の仏訳。1331年から33年の間に翻訳。
- 4 『皇帝の閑暇<oisiveté des emperieres>』：1215年成立のゲルワシウス=ティベリエンシス<Otia Imperialia>の仏訳。1320年代に完成したと推定される。
- 5 『聖地への道案内<directoire pour faire le passage en terre sainte>』：1332年頃に成立しフランス王フィリップ6世に献呈された、作者未定<directorium ad passagium faciendum>の仏訳であり、1332年から37年の間に翻訳されたと思われる。
- 6 『戦や優れた統治をなさんとする統治者への教え<enseignements ou ordenances pour un seigneur qui a guerres et grans gouvernemens a faire>』：モンフェラート公テオドロス=パレオロゴスがギリシア語で記し、その後1330年にラテン語に翻訳した<De regimine principis>の仏語訳であり、1335年頃完成。
- 7 『パリの慣例に従った一年間の書簡と福音<épîtres et évangiles de tout l'an selon l'usage de Paris>』
- 8 『チェスを嗜む高貴なる者および平民たちの心得<moralité des nobles hommes et de gens du peuple soubz le gieu des eschés>』：ドミニコ会士ヤコポ・デ・チェッソレが13世紀後半に著した<Liber de moribus hominum et officiis nobilium super ludo scacchorum>の仏訳。1332年から1350年までの間に完成。
- 9 『黄金伝説<légende dorée>』：1267年頃に完成したジェノヴァ大司教ヤコポ=ダ=ウェアギネの手になる著名な聖人伝<Legenda aurea>の仏訳。1348年以降に完成。
- 10 『教会の鑑<mirouer de l'église>』：ユーグ=ド=サン=シェールの<speculum ecclesiae>の仏訳。1335年から1350年までの間に完成。
- 11 『軍事に関するフラウィウス=ウェゲティウスの書<li livres flave vegece de la chose de chevalerie>』：4世紀末から5世紀前半頃に成立したフラウィウス=ウェゲティウス=レナトゥスの軍事思想書『軍事

論< de re militari >』の仏訳。

## 12 シャルル 6 世の蔵書目録にのみ記録が残る、アレクサンドロス大王に関する作品

記書リストが示すのは、史書に限らず統治書や軍事書、そして旅行記まで、当代の人気作品を網羅的に仏語化しようとするジャンあるいはヴァロワ王家のきわめて貪欲な姿勢である<sup>39</sup>。そしてジャンには、翻訳者としての範囲を超え、俗語を駆使し独自の解説を加えて新しい史書を記そうとする意欲も垣間見える。

例えば、ヴァンサン『歴史の鏡』では、セビリヤのイシドールスの記述を参考に、インドの住民について< Terra Indiae fauonij spiritu saluberrima in annos bis metit fruges, vice hyemis ethesijs potitur. Gignit autem tincti coloris homine>と記す<sup>40</sup>。インドの民はその肌が色を帯びているということを述べているだけであるが、ジャンは、その肌の色が「yndes」すなわち藍色であるからインドと呼ばれるのだと解説している<sup>41</sup>。ジャンのこうしたやや得意げな解説は、翻訳のいたるところに見受けられる<sup>42</sup>。

確かにジャンの訳業は上で述べたように誤りを含んでおり、時にそれは深刻なものであった。アレクサンドロス大王とインド人との戦いの場面を描いた箇所、ヴァンサンは「アレクサンダーは、死んだ馬の尾をつかみ、自軍へと引きずっていった。インド人たちが皮をとってしまうことのないように。それは彼にとって大きな屈辱であった。」< Alexander exanimem equum cauda comprehensum, in prtes retrahit: metuens ne spoliū Indi raperent, quod sibi esset valde pudibundum.>と記す<sup>43</sup>。ここでアレクサンドロスは、敵方に皮をとられないように、死んだ馬の尾をつかみ、自軍へと引きずっている。それがジャンの翻訳では< Alixandre aussi comme demi mort toute ouerre de bataille prist la queue dun cheval et se trait en ses parties.>となってしまう<sup>44</sup>。ここでは、死にそうなのはアレクサンドロスであり、馬の尻尾をつかみ命からがら自軍へと引き返す者として記されている。この誤訳に引きずられ、ライデン大学図書館が所蔵する写本のなかには、馬の尾をつかむアレクサンドロスの姿が描かれている。

しかしこうした誤訳を含むとはいえ、ジャンの訳業は、フランス王権が主導する仏語翻訳事業に継続性と一定の規模を与えたという点において象徴的な意味を持っていた。カペー朝期の『王の物語』からヴァロワ朝期の『歴史の鑑』 俗語版まで、王権もしくはその周辺における俗語史書編纂事業は必ずしも活発とはいえない。歴史家たちは読者（受容者）の意向を踏まえつつ、また俗語の可能性を慎重に探りながら、ラテン語史書に記された普遍史的世界観を「フランス史」に置き換えていたといえるだろう。従来語られてきた「フランス語の勝利」は、歴史記述の現場では比較的長期に及ぶ試行期を必要としていたのである。

## おわりに

本稿では、13世紀後半から14世紀前半を対象に、法実務の場で発給された俗語証書をひとつの手がかりに、また比較的王権に近いところで生み出された複数の史書をもうひとつの手がかりとして、ラテン語史書が圧倒的な優位を占め聖書的キリスト教的な世界観のもとで過去が認識されていた状況から、次第に、俗語による歴史記述が、フランスあるいはフランス語をひとつの枠組みとして過去を解釈しはじめる状況を見てきた。その作業は、はじめはやや慎重で、そして最終的には仏語に対するある種の自負をもって進められていく。

ただしそれは、王権主導で俗語による史書の編纂を知的エリートたちに命じれば済むといった単純なものではなく、俗語の可能性を探りながら慎重に進められた、多くの歴史家たちの試行錯誤の結果であった。13世紀後半、俗語による王国年代記をいち早く編纂したサン＝ドニの修道士プリマは、シュジェールが著した『ルイ6世伝』を翻訳する際に、「この仕事を前にして我々は身がすくむ。ラテン語からフランス語に翻訳することがどれほどの困難であるかは、誰にも知り得ないからである。」とその心情を吐露している。しかし14世紀後半にシャルル5世の側近として活躍したニコル＝オレームは、アリストテレス『政治学』の翻訳に際して、『アカデミカ』でキケロが語っているように、重要な物事についての権威ある書物



は、自国の言葉で記されるのが最も望ましいのである。」と記し、アリストテレスの仏語への翻訳を自信を持って進めている。二人の翻訳家の発言は、この間の変化を象徴的に示している。12世紀ヨーロッパは、古代の文献のラテン語への翻訳によって知的世界の大きな変化を経験したが、少なくともフランス王国においては、13世紀後半から14世紀後半にかけて、もうひとつの翻訳、すなわち今度はラテン語から俗語への翻訳が少しずつ意味を持ち始める時期であったといえることができるだろう。もっとも本稿は、この時期の変化のいくつかの特徴を断片的に紹介したに過ぎない。記述言語の俗語化が持つ意味を正しく理解するためには、ひとつひとつの俗語史書に込められた歴史家たちのさまざまな思いや戦略を丁寧に読み解いていく作業が必要だと思われる。

<sup>1</sup> F. Mazel, *Féodalités (888-1180)*, Paris, 2010; J.- C. Cassard, *L'âge d'or capétien (1180-1328)*, Paris, 2011; Boris Bove, *Le temps de la guerre de Cent Ans (1328-1453)*, Paris, 2010.

<sup>2</sup> 彼らのそうした試みは、一王国の歴史を書き記す王国年代記の場合にも確認される。中世フランス王国で制作された王国年代記『王の物語』写本に付された世界図の意味に関する試論的検討として、鈴木道也「中世王国年代記写本のなかの世界図 <mappamundi>」『東洋大学文学部紀要 史学科篇』2013年、第39号、229-258頁。

<sup>3</sup> N. Bériou, J.-P. Boudet et I. Rosier-Catach (eds.), *Le pouvoir des mots au Moyen Âge*, 2014.

<sup>4</sup> 例えば、E. アウエルバッハ（小竹澄栄訳）『中世の言語と読者 ラテン語から民衆語へ』八坂書房、2006年、またE. アウエルバッハ（篠田一士・川村二郎訳）『ミメシス—ヨーロッパ文学における現実描写（上・下）』筑摩書房〈筑摩叢書〉、1967-69年[ちくま学芸文庫、1994年]、ダンテ=アリギエーリ（中山昌樹訳）『俗語論 水陸論』新生堂、1925年（[復刻版]日本図書センター、1995年）など。

<sup>5</sup> W. D. エルコック（大高順雄訳）『ロマン語—新ラテン語の生成と進化』学術出版会、2009年。

<sup>6</sup> ガブリエル=スピーゲルの一連の著作も、かかる理解を前提とする。G. Spiegel, *The Chronicle Tradition of Saint-Denis: A Survey*, Brookline/Leyden, 1978; G. Spiegel, *Romancing the Past. The Rise of Vernacular Prose Historiography in Thirteenth-Century France*, Berkeley, 1993; G. Spiegel, *The Past as Text: The Theory and Practice of Medieval Historiography*, Baltimore and London, 1997; G. Spiegel(ed), *Practicing History -New Directions in Historical Writing after the Linguistic Turn-*, New York, 2005.

<sup>7</sup> J. P. Genet(éd.), *L'histoire et les nouveaux publics dans l'Europe médiévale (XIIIe-XVe siècles)*. Actes du colloque international organize par la Fondation européenne de la science à



la Casa de Velásquez, Madrid, 23-24 avril 1993, Paris, 1997.

- <sup>8</sup> S. Lusignan, *La langue des rois au Moyen Âge : Le français en Angleterre*, Paris, 2004 (以下S. Lusignan, *La langue*と略記) およびS. Lusignan, Le choix de la langue d'écriture des actes administratifs en France : communiquer et affirmer son identité, C. Boudreau, K. Fianu, C. Gauvard, et M. Hébert(éd.), *Information et société en Occident à la fin du Moyen Âge*, Paris, 2004, pp. 187-200.
- <sup>9</sup> G. Labory, Essai d'une histoire nationale au XIIIe siècle : la chronique de l'Anonyme de Chantilly-Vatican, *Bibliothèque de l'Ecole des Chartes*, 148, 1990, pp. 301-354; G. Labory, Les début de la chronique en français(XIIe et XIIIe siècles), E. Kooper (ed.), *The Medieval Chronicle III. Proceedings of the 3rd International Conference on the Medieval Chronicle*. Doorn/Utrecht 12-17 July 2002, Amsterdam/New York, 2004, pp. 1-26.
- <sup>10</sup> J. M. Moeglin, Une première histoire nationale Flamande;L'Ancienne chronique de Flandre(XIIe-XIIIe siècles), D. Barthélemy et J.-M.Martin(éd.), *Liber Largitorius: Études d'Histoire Médiévale offertes à Pierre Toubert par ses élèves*, Genève, 2003, pp. 455-476.
- <sup>11</sup> リュジニャンは国王証書の網羅的な分析の結果、言語選択における大きな画期を1330年10月に認めているが、その理由については解明されていない。この問題については、S. Lusignan, L'usage du latin et du français à la chancellerie de Philippe VI, *Bibliothèque de l'école des chartes*, 1999, 157, pp. 509-521.
- <sup>12</sup> I. Guyot-Bachy, Quelques tendances de l'écriture de l'histoire dans le royaume de France (1270-1348), C. Péneau(dir.), *Itinéraires du savoir de l'Italie à la Scandinavie (Xe-XVIIe siècle). Études offertes à Élisabeth Mornet*, Paris, 2009, pp. 279-298.
- <sup>13</sup> N. de Wailly, Examen de quelques questions relatives à l'origine des chroniques de Saint-Denis, *Mémoires de l'Institut royal de France. Académie des Inscriptions et Belles Lettres*, 17, 1847, pp. 405-407.
- <sup>14</sup> この点については、鈴木道也「中世フランス王国の歴史・国家・世界観 『歴史の鑑』と『フランス大年代記』」森田武教授退官記念会編『近世・近代日本社会の展開と社会諸科学の現在』新泉社、2007年、475-495頁参照。またS. Lusignan, *Préface au Speculum majus de Vincent de Beauvais: réfraction et diffraction*, Montréal/Bellarmin-Paris, pp. 55-60は、ヴァンサンとフランス王権との結びつきについて、<Cum... in monasterio Regalis Montis ad exercendum lectoris officium habitarem, ex ore meo divinum eloquium humiliter cum Dei reverencia suscepisti >, Liber consolatorius de morte amici, [Paris, B.N., ms. Lat. 16390, f. 15.]などの記述を根拠とする。
- <sup>15</sup> Donatella Nebbiai- Dalla Guarda, *La Bibliothèque de l'abbaye de Saint-Denis en France du IXe au XVIIIe siècle*, Éditions du CNRS, Paris, 1985 (以下、Nebbiai- Dalla Guarda, *La Bibliothèque*と略記)。
- <sup>16</sup> Des rois et des moines. Livres et lectures à l'abbaye de Saint-Denis (XIIIe-XVe siècles), F. Autrand, C. Gauvard et J. M. Moeglin (dir.), *Saint-Denis et la Royauté. Études offerts à Bernard Guenée*, Paris, Publication de la Sorbonne, 1999, pp. 355-374.
- <sup>17</sup> I. Guyot-Bachy, La Chronique abrégée des rois de France de Guillaume de Nangis: trois étapes de l'histoire d'un texte, S. Cassagnes-Brouquet, A. Chauou et L. Rousselot (éd.), *Religion et*

*mentalités au Moyen Âge. Mélanges en l'honneur d'Hervé Martin*, Rennes, 2003, pp. 39-46; I. Guyot-Bachy et J. M. Moeglin, *Commnet ont été continuées les Grandes Chroniques de France dans la première moitié du XIVe siècle*, *Bibliothèque de l'Ecole des Chartes*, 163, 2005, pp. 385-433.

<sup>18</sup> 修道院における蔵書の管理を一般的に委ねられていたのは、armariusと呼ばれる者たちであった。

<sup>19</sup> <Je, frere Guillaume ditz de Nangis, moine de la devant dite eglise de Saint Dyonise, ay translaté de latin en françois, a la requeste des bonnes gens qui m'en ont prié et requis, ce que j'avoie autrefois fait en latin selon la forme d'un arbre de la generacion desdis roys, pour ce que cil qui latin n'entendent....>, Guillaume de Nangis, *Chronique française abrégée des rois de France*, P.-C.-F. Daunou(éd.), *RHGF*, t.20, p.647.

<sup>20</sup> H. Géraud(éd.), *Chronique latine de Guillaume de Nangis de 1113 à 1300 avec les continuations de cette chronique de 1300 à 1368*, vol.2, Paris, 1843[2002, Adamant Media Corporation].

<sup>21</sup> 例えばメロヴィング家のシルデリク 1 世やカロリング家のシャルル 2 世に関しては次のように記される。<...celui-ci(Guidemar) recherchât pour lui(Childeric I) la paix avec les Francs>, *Le Grandes Chroniques*, t. III, pp. 288-290 : <...a un chevalier qui Baudouyn estoit apelez la conte de Flandres que il gardoit en la main le roy, avecques une sene fille quil ot par mariage>, Jules Viard (éd.), *Le Grandes Chroniques de France*, Paris, 1927, t. IV, pp. 255-256.

<sup>22</sup> H. Moranvillé, *Le texte latin de la chronique abrégée de Guillaume de Nangis*, *Bibliothèque de l'école des chartes*, 51, 1890, pp. 652-659.

<sup>23</sup> 「この歴史〈hystoire〉を読む者全てに、そしてわが主に挨拶を送る。ここにこの作品<ouvre>が始まる。多くの者が、フランス王の家系に、すなわちそれがどこに由来し、またいかなる系統より生まれ出るのか、という点について疑いを抱いているので、疑いようもなく高きお方の命によりて、この作品を作ることが企画された。この歴史〈hystoire〉は、諸々の歴史<hystoires>や全ての王の事績が記されたフランスのサン＝ドニの修道院の〈lettre〉や〈croniques〉の構成に従って記される。なんとなれば、我々はそこから歴史〈estoire〉の源を汲み出さなければならないからである」〈Cil qui ceste ouvre commence à touz ciaux qui ceste hystoire liront saluz en Nostre Seigneur. Pour ce que pluseurs genz doutoient de la genealogie des rois de France, de quel original et de quel lignie ils ont descendu, enprist il ceste ouvre à fere par le commandement de tel home que ils ne pout ne ne dut refuser. ...Si sera ceste hystoire descrite selon la lettre et l'ordenance des croniques de l'abaïe de Saint Denis en France, où les hystoires et li fait de touz les rois sont escrits, car là doit on prendre et puisier l'original de l'estoire.>, *Le Grandes Chroniques de France*, t. I, prologue, pp. 1-2.

<sup>24</sup> かかる指摘は、歴史学者よりも中世文学研究者から行われることが多い。例えば、E. Andrieu, *L'histoire des rois des Francs dans les Grandes Chronique de France : des confirmations du muthe à l'aventure généalogique*, J.-C. Cassard, É. Gaucher, et J. Kerhervé, (dir.), *Vérité poétique, Vérité politique. Mythes, modèles et idéologies politiques au Moyen Age Actes du colloque de Brest, 22-24 septembre 2005*, Brest, 2007あるいは、A. Arizaleta (éd.),

*Poétique de la Chronique, L'écriture des textes historiographiques au Moyen Âge (Péninsule ibérique, France et Scandinavie, XIe-XIVe siècle), Colloque international de l'Irpall/CNRS/FRAMESPA, Université de Toulouse-Le Mirail, 20-21 avril 2006, Toulouse, 2008.*

- <sup>25</sup> J.-A. Buchon, *Chronique métrique de Godefroy de Paris, suivie de la taille de Paris, en 1313, publiées pour la première fois, d'après les manuscrits de la Bibliothèque du Roi*, Paris, Verdière (Collection des chroniques nationales françaises, 9), 1827, p. vii + 304 + x + 200.
- <sup>26</sup> I. Guyot-Bachy, *Le 'Memoriale Historiarum' de Jean De Saint-Victor. Un historien et sa communauté au début du XIVe siècle*, Turnhout, 2000.
- <sup>27</sup> Jean de Saint-Victor, *Memoriale Historiarum*, RHF, XXI, p. 656.
- <sup>28</sup> Geoffroi de Paris, v. 4527-4580, pp. 177-178.
- <sup>29</sup> de Wailly Natalis, *Examen critique de la Vie de saint Louis par Geoffroi de Beaulieu, Bibliothèque de l'école des chartes*, 1844, . 5, pp. 205-231.
- <sup>30</sup> この伝記は教皇グレゴリウス10世の命によりルイ9世の列聖調査のための資料として制作されたものである<Audivit fidelis rex dum adhuc esset ultra mare de quodam magno Sarracenorum Soldano qui omnia librorum genera quae necessaria esse poterant philosophis Sarracenis, diligenter faciebat inquiri, et sumptibus suis scribi, et in armario suo recondi; ut literati eorum librorum copiam possent habere, quoties indigerent... Concepit, quod revertens in Franciam omnes libros Sacrae Scripturae, quos utiles et autenticos in diversis armariis abbatiarum invenire valeret, transcribi sumptibus suis faceret, ut tam ipse quam viri literati ac religiosi familiars sui, in ipsis studere possent ad utilitatem ipsorum et aedificationem proximorum. Sicut cogitavit, ita et reversus perfecit, et locum aptum et fortem ad hoc aedificari fecit, scilicet Parisius in capellae suae thesauro, ubi plurima originalia tam Augustini, Ambrosii, Hieronymi, atque Gregorii nec nonet aliorum orthodoxorum doctorum libros sedule congregavit: in quibus quando sibi vacabat valde libenter studebat et aliis as studendum libenter concedebat... Potius autem volebat de novo facere libros scribi quam emere jam conscriptos: dicens, quod hoc modo sacrorum librorum numerus et utilitas copiosius augebatur... Quando studebat in libris et aliqui de familiaribus suis errant praesentes, qui litteras ignorabant, quod intelligebat legendo proprie et optime noverat coram illis transferre in gallicum de latino.>, A. Duchesne, *Historiae Francorum Scriptores*, tom. V, p. 457.
- <sup>31</sup> <Ja soit que tu entends bien le latin, mais toutevois est de moult plus legiers a entendre le françois que le latin>, S. Lusignan, *Parler vulgairement. Les intellectuels et la langue française au XIIIe et XIVe siècles*, Paris/Montréal, 1987, p. 149.
- <sup>32</sup> F. Hennebert, *Histoire des traductions françaises d'auteurs grecs et latins pendant le XVIe et le XVIIe siècles*, Bruxelles, 1861.
- <sup>33</sup> L. Delisle, *Recherches sur la librairie de Charles V*, 2 vols., Paris, 1905.
- <sup>34</sup> P. Meyer, Les premières compilations françaises d'histoire ancienne, *Romania*, 14, 1885, pp. 1-85; P. Meyer, Les anciens traducteurs français de Végèce et en particulier Jean de Vignay, *Romania*, 25, 1896, pp. 401-408.
- <sup>35</sup> A. Thomas, Anonyme italien, auteur d'une traduction française des Lettres de Sénèque à Lucilius, *Histoire littéraire de la France*, 35, 1921, pp. 633-635; A. Thomas, Traductions

françaises de la Consolatio philosophiæ de Boèce, *Histoire littéraire de la France*, 37, 1938, pp. 419-470; L. Royer et A. Thomas (éd.), *La somme du Code, texte dauphinois de la région de Grenoble, publié d'après un manuscrit du XIIIe siècle appartenant à la Bibliothèque du château d'Uriage*, Paris, 1929; R. Bossuat, Anciennes traductions françaises du De officiis de Cicéron, *Bibliothèque de l'École des chartes*, 96, 1935, pp. 246-284; R. Bossuat, J. Miélot, traducteur de Cicéron, *Bibliothèque de l'École des chartes*, 99, 1938, pp. 82-124; R. Bossuat, Traductions françaises des Commentaires de César à la fin du XVe siècle, *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, 3, 1943, pp. 253-411; R. Bossuat, Vasque de Lucène, traducteur de Quinte-Curce (1468), *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, 8, 1946, pp. 197-246; R. Bossuat, Jean de Rouvroy, traducteur des Stratagèmes de Frontin, *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, 22, 1960, pp. 273-286 et 469-489; R. Bossuat, Raoul de Presles, *Histoire littéraire de la France*, 40, 1974, pp. 113-186.

<sup>36</sup> P. Meyer, Les anciens, pp. 401-423; O. Jordan, *Jehan du Vingnai und sein Kirchenspiegel*, Hall, 1905; G. E. Snively, *The Aesopic Fables in the Miroir Historial of Jehan de Vignay*, Baltimore, 1908.

<sup>37</sup> しかしこれらの写本は、以下に記すように部分的なものであることが多く、全体を伝えるものは少ない[写本番号に続く数字は制作年代、系譜番号、収録されている巻数]。

(1) Baltimore, Walters Art Museum, W.140 (anc. 506), 432 f., XIV (J3), Livres XVII-XXIV : (2) Besançon, Bibliothèque municipale, 434, f. 380-386, 1372, Livre IV, ch. 2-8 : (3) Chantilly, Bibliothèque et Archives du Château, 722, f. 1-484, 1459-1462 (N3), Livres XXIII-XXXII : (4) Den Haag, Koninklijke Bibliotheek, 72 A 24 (GH) [N], Livres XXVI-XXXII : (5) Den Haag, Koninklijke Bibliotheek, 128.C.1, 3 tomes, fin XV (EP2, EP3, EP4), Livres X-XXXII : (6) København, Kongelige biblioteket, Thott 429 2°, 540 f., fin XIV (T2), Livres XVIII-XXXII : (7) Leiden, Universiteitsbibliotheek, Voss. Gall. f. 3A, v. 1332-1335 (A1), Livres I-VIII : (8) London, British Library, Additional, 6416 art. 5, XIV (fragments de B3), Fragments des livres XXV-XXXII : (9) London, British Library, Lansdowne 1179, 1/2 XV (C2), Livres IX-XVI : (10) London, British Library, Royal, 14. E. 1, 208 + 343 f., v. 1480 (E1), Livres I-IX : (11) London, British Library, Royal, 19. D. 1, f. 148v-165v, XIV (ExL), Livre XXXII, ch. 2-66 : (12) Los Angeles, J. Paul Getty Museum, Ludwig, XIII.5, 2 vol., 191 + 232 f., v. 1475 (L1), Livres I-VIII : (13) Oxford, Bodleian Library, Bodley, 761, f. 195v-200v (ExO) [N], Livre XXXII, ch. 54-66 : (14) Paris, Bibliothèque Mazarine, 1554, 270 f., XIV (M1), Livres VII, ch. 44-XI, ch. 20 : (15) Paris, Bibliothèque nationale de France, Arsenal, 5080 (A2) [N], Livres IX-XVI : (16) Paris, Bibliothèque nationale de France, français, 50-51, 1459-1462 (N1, N2) [N], Livres I-XI et XII-XXII : (17) Paris, Bibliothèque nationale de France, français, 52 (C4) [N], Livres XXV-XXXII : (18) Paris, Bibliothèque nationale de France, français, 308-311 (G1, G2, G3, G4) [N], Livres I-XXXII : (19) Paris, Bibliothèque nationale de France, français, 312-314 (Or1, Or2, Or4) [N], Livres I-VIII et XVII-XXXII : (20) Paris, Bibliothèque nationale de France, français, 315, fin XIV (P2), Livres IX-XVI : (21) Paris, Bibliothèque nationale de France, français, 316, 24.11.1333 (J1), Livres I-VIII : (22) Paris, Bibliothèque nationale de France, français, 317-327, av. 1482 (DL1a, DL1b, DL1c, DL1d, DL2a, DL2b, DL3a, DL3b, DL3c,

- DL6a, DL6b), Livres I-XVI, XXVI-XXVIII : (23) Paris, Bibliothèque nationale de France, français, 6354-6359, 321 + 284 + 309 + 269 + 217 + 294 f., av. 1477 (Tc1, Tc2, Tc3, Tc4, Tc5, Tc6), Livres I-XI et XVII-XXXII : (24) Paris, Bibliothèque nationale de France, nouvelles acquisitions françaises, 10721, f. 108r-144r, 1/2 XVI (ExP) : (25) Paris, Bibliothèque nationale de France, nouvelles acquisitions françaises, 15939-15944 (B1a, B1b, B1c, B2a, B2b, B2c) [N], Livres I-XXIV : (26) Tours, Archives départementales d'Indre-et-Loire, 2 I 2, 6 f., 2/4 XIV (fragments de A4), Extraits des livres XXVII-XXVIII : (27) Vaticano, Biblioteca Apostolica Vaticana, Reginensi latini, 538, 266 f., 1/2 XV (C1), Livres I-VIII : (28) Vaticano, Biblioteca Apostolica Vaticana, Reginensi latini, 1514, f. 125-153v, XV (ExV), Extraits des livres XXV, XXVI et XXIX: A. Molinier, *Les sources de l'histoire de France des origines aux guerres d'Italie(1494):Les Capetiens*, 1180-1328, vol.III, Paris, 1903.
- <sup>38</sup> G. Hasenohr et M. Zink (dir.), *Dictionnaire des lettres françaises: Le Moyen Age*, 1992 (première édition: 1964), pp.858-861.
- <sup>39</sup> L. Evdokimova, La traduction en vers et la traduction en prose à la fin du XIIIe et au début du XIVe siècles: quelques lecteurs de la Consolation de Boèce, *Le Moyen Age*, 109, 2003, pp. 237-260.
- <sup>40</sup> *Speculum historiale*, 1, 62 [Douai (1624), p. 24.].
- <sup>41</sup> <La terre dynde a bon air et sain et porte blee. suez foez lan. et est la terre atrempee sanz yver. Et porte hommes tains de couleur ynde.>, *Miroir historial*, 41r.-41v. [Leiden, Universiteitsbibliotheek, Voss. Gall. f. 3A].
- <sup>42</sup> C. A. Chavannes-Mazel, *The miroir historial of Jean Le Bon The Leiden Manuscript and its Related Copies*, Leiden, 1988, pp. 53-55.
- <sup>43</sup> *Speculum historiale*, 4, 49 [Douai (1624), p. 120.].
- <sup>44</sup> *Miroir historial*, 175r. [Leiden, Universiteitsbibliotheek, Voss. Gall. f. 3A].